

テキストとしての人生

—— 18世紀の書簡文化と文学における表現及び報告手段としての手紙

バーバラ・ベッカー＝カンタリノ

久保 京花 訳

手紙は物書きをする女性が経験を積む場であった。男性の文学者によって設立され、尊重された文学上の分類には小説や叙情詩、戯曲というものがあった。女性たちがそれらの領域に著者として18世紀と19世紀に登場するよりも前に、彼女たちは遅くとも17世紀以降、手紙という文面を使ってヨーロッパの至る所で初めて自分の力で書き物をしようと試みた。だからヴァージニア・ウルフはエッセイ『ドロシー・オズボーンの手紙』でこのように述べている。「もしドロシー・オズボーンが1827年に生まれていたら、彼女は小説を書いただろう。そしてもし彼女が1527年に生まれていたら、まるっきり何も書けなかっただろう。しかし彼女は1627年に生まれていて、本を書くことはその頃女性にとっては滑稽なことであったにもかかわらず、手紙を書くことはふさわしいことであった。そして、沈黙は次第に壊され、茂みの中でかさかさと言を立て始めた…。」(*The Second Common Reader*, Bd. 2, S. 52)。

ヴァージニア・ウルフがここで述べている「茂み」は、さらに高いブナの木へと成長する。それは、(フランス小説の出発点を意味している)スキューデリ夫人の小説に始まり、ゾフィー・フォン・ラロッシュ『シュテルンハイム嬢物語』、フランシス・バーニー『イブリーナ』、スタール夫人『デルフィーヌ』、ジェーン・オースティン『高慢と偏見』そしてベッティーナ・フォン・アルニムの書簡本へと発展した。たとえ文学史がそこに「文学界という山のふもとにある文芸の香草」しか見ようとしなかったとしても。この

「香草」については、「山を恐ろしいほどに弱らせてしまい、そのせいで山頂にはほとんど何も生えていない！」とも書かれている (Karl Immerman: *Werke*, Bd. 9, S. 105)。書き物をする女性が、文学の状況を根本的に変えたという点はたしかに正しい。だが本当にそこにはハーブとパセリが生い茂っていただけなのだろうか？主婦と、その場所であるキッチンという概念で固定されていた19世紀というものは、それだけしか見ようとしなかったが。

まずは確固たる規範（誰の規範なのか？）と境界（と「その外にあるもの」全てを除外すること）を生み出している文学的な評価を一旦無視しよう。そしてそこから離れて、コミュニケーションと自己表現の新しいメディアとして機能した書簡文化とその担い手、すなわち女性自身に注目しよう。この女性たちとは誰なのか？どこで、そしてどのように彼女たちは生活したのか？なぜ書くことを始めたのか？一体どんな手紙を書き、誰に宛てて書いたのか？どんな内容、表現形式、そして伝達機能がこの手紙にはあったのか？どうやって世間に、そして特定の人に宛てた手紙は届いたのか？そして最後に、手紙はその後文学や書簡体小説、フィクションの文学へとどうやって展開したのだろうか？女性によって持ち込まれた手紙文化と回想録文学が17世紀、特に18世紀と19世紀の終わりに、どのような過程で女性にとっての重要な書く場所となったのかを、イギリスやフランス、ドイツの有名な事例を用いて示す。

女性の手紙と暮らし

18世紀という手紙の古典時代を概観する際に、プライベートなものや商業的なもの、もしくは文学的なものといった、我々が抱いている現代的な手紙のイメージを崩さねばならない。この時代、一方では物理的な距離が理由で社交の機会を持ってないことが、他方では気持ちを伝えたいという欲求が、まさしく手紙への情熱を生じさせた。手紙によって知り合いを作ることで、個人的に知らない人との交友関係も広がった。ゾフィー・フォン・ラロッ

シュは（ヴィーラントとの婚約解消、そしてトリーア選挙区大司教の枢密顧問であったフランク・ラロッシュと結婚したあと）ヴィーラントの2度目の婚約者であったチューリッヒのジュリー・ボンデリとお互いに知り合うことがないまま文通をしていた。

手紙というものは人々、特に女性にとって、旅行や個人的に人と会う機会が多方面で少ないことの代わりになると思われたのであった。女性たちは、街にある家や領地を同伴という形のみでしか離れることができず、また口実がなければ出ることはできなかった。——ラ・ロッシュの頃になってもまだそうだった。彼女は、1772年に初めて出版された自身の小説による報酬をもらってから数ヶ月経ってはじめて、ダルムシュタットの宮殿への旅行ができた。しかし、それは娘の付き添いという名目であって、旅行に行くという許可を夫から得る必要があった。このようにしばしば隔離され、身動きができない状況にあった女性たちは、その場にはない文通相手とその人たちの世界に自分のことを知らせるために、そして離れた友人関係を終わらせないために、手紙を利用していた。

しかし、比較的教養があって裕福な、書き物をする暇がある女性だけがこの書簡文化に参入できた。一方、小市民階級と下層の女性（工女、侍女、市場の女商人、農民、もしくは日雇い女）は、文字がうまく書けないか、全く書けなかったのであった。彼女たちは美しい手紙を書くための時間、もしくは手段がほとんどなかった。そのため彼女たちは、紙切れで、せいぜい御者の男や商人へぎこちない報告しかできず、めったに受け取ってもらえなかった。郵便も高価なもので、18世紀後半においてはまだマグデブルクからベルリンまでの郵送は2グロッシェン半（3キロのパンもしくは1ポンドの肉とほとんど同じくらい）で、そして2日間もかかるのであった。（ローマからケーニヒスベルクまで2ヶ月半もかかっていた！）

このような状況のなか、小作人の娘で仕立屋の妻であったアンナ・ルイーザ・カルシュの手紙（と文芸作品）は特殊な例である。「民衆女詩人」とし

てベルリンの社交界で次々と紹介されたアンナ・ルイーザは、独学で詩を書き始めた。彼女の文学助言者で、かつ彼女が大いに尊敬していたアナクレオン派の愛国主義的な詩人ルートヴィヒ・グライムと、長い年月にわたって活気のある論理的な（しばしば面白おかしく教養のない構成の）文通をしていた。彼女はある手紙で、1763年8月のサンスーシ宮殿におけるフリードリヒ2世との謁見について報告した。そこでは、大王との会話が対話という形で再現されていた。

大王：一体どうやってそちは言葉をうまく扱っているのか？お前はどのようにやって言葉を習ったのか？

アンナ：私は母国語をほとんど思い通りに使っています！

大王：綺麗に使っているように思うのだが、文法はどうしたのか？

アンナ：恐れ多くも陛下！私は少ししか間違えておりません！

大王：全く間違えてはいけない！（…）そちには夫がいるのか？

アンナ：もちろん！我々の陛下殿！しかし夫はあなたの兵団から逃げ出し、ポーランドをさまよひ、再婚し、私に離婚をしてくれるよう申し込みました。承知しますよ、もちろん。なぜなら彼は私の面倒を見てくれないから！

(Frauen der Goethezeit, S. 70f.)

この謁見についてのカルシュの報告がどれくらい正確であったのかは定かではないが、書き物をする女性たちの状況を伝えてはいる。彼女たちは「母国語を比較的に不自由なく使っている」が、文法（と学問的な教養）に関しては「少しの間違い」をするのであった。ただし、学識のある家庭で育った（ゴットシェート夫人やラ・ロッシュのような）女性もしくは「私的」な教育を受けていた（エヴァ・ケーニヒヤメタ・クロップシュトックのような）女性は例外である。

読む女、そして手紙を書く女というものは裕福な市民階級と貴族階級で生じた現象だった。彼女たちの手紙は秘密の恋文を除いて、受取人「だけ」に見られることはめったになかった。特に、18世紀の「感傷主義時代」においては友人との手紙は拡散された。人々はそこから一部分を書き写し、もしくは「美しい」箇所を選び出し、家族や訪問客に読み聞かせていた。例えば、ヴィーラントやクロップシュトックがチューリッヒのサークルで受け取った女性の手紙、婚約者カロリーネ・フラックスランド・ヘルダーの往復書簡の一部やゾフィー・フォン・ラロッシュのサークルでの手紙などがそのように使われた。家族や社交の場で朗読するということが、団欒の重要な一形式だったのである。だから、1755年にメタ・クロップシュトックはハンブルクで婚約した姉に次のような手紙を書いた。

あなたが私の手紙を誰にも見せないと決めてくれて、とても嬉しく思います。そのまま続けてください。そうしてくださるなら、私が自由な気持ちで手紙を書いているということを保証します。場合によっては、あなたはその一部分なら読み聞かせても良いのです (*Frauen der Goethezeit*, S. 100)。

女性たちの個別の人間関係や個性というものが私的なものにされるにつれて彼女たちの手紙も——ロマン派の時代においてはきわめてはっきりしているのだが——ある人間に対してだけに宛てられた、まったくのプライベートな手紙となった。さらにいうと、フランス革命以降、ナポレオン時代と特に王政復古の間には、郵便物が取り締まられるのを避けるために部分的に名前と出来事を暗号化し、内容を自主的に規制しなければならなかった。(手紙はそのつど調査のために興味を持った秘密警察によって書き写されていた。) ドロテーア・シュレーゲルが1803年から1809年までの間にパリとケルンで書いた手紙や、ラーエル・ファルンハーゲンの手紙に書かれたものがそうで

あった。

しかしながらたいいの場合、18世紀では女性の手紙は非政治的で個人的なもの、すなわち家庭のことや女性の生活領域を映し出したもので、手紙の中ではそのような領域について話題になった。学識的なものや商売及び政治的なものは女性にとっては例外的であり、原則的に女性はそうしたものにから除外されていた。(もしくは例外的な場合にその権利を与えられたのは、例えばマリア・テレジアのように国を統治してきた領主夫人、フリードリヒ2世の妹、ヴィルヘルミーネ・フォン・バイロイトのような地位の高い貴族、もしくはユトレヒトに住んでいたアンナ・マリア・ファン・シュルマンのような17世紀の「学識のある女性」だった。その上彼女らはラテン語で書くような模範的な人たちだった。)女性の「活動領域」は家庭や家族といったところに限定されており、彼女たちはそこでの生活状況、すなわち女性たちが生き、何かを経験する家庭という社会を描き出し、それを手紙に取り込んだ。そこが手紙文学の本来の場所であり、政治、学問、宗教、科学や美学に関連した論題がないところである。この点において、偉大な男性の往復書簡との第一のきわめて重要な違いがある。それは今日まで良いとされてきた手紙、すなわち重要な往復書簡の概念を規定し、我々が図書館で目にするような書簡本とは違うのだ。

女性が書いた最初の主要な書簡作品は、セヴィニエ夫人のものであった。この作品は彼女が属していた貴族階級特有の高貴で奇抜なものであったにも関わらず、私的で家庭的な傾向がその中で既に示されていた。それはまさしく彼女が特権のある階級の女性として振る舞っていた生活領域であった。彼女が25歳のとき、夫が(他の愛人をめぐった)決闘で死んでしまった。未亡人となった彼女には破綻した財産が残り、さらに当時6歳の娘と4歳の息子の世話もしなければならなかった。たくさんいる彼女の崇拜者と結婚する代わりに、彼女は子育て、ブルゴーニュにある遺産の管理そして社交的な生活というものに、自分で政治的な野望を持つことなく専念した。その間に彼

女はこのような生活と交友関係を手紙のなかにしっかりと残したのであった。彼女が——プロヴァンスに住んでいる——娘に手紙を書くときには、「近況を包み隠さずに述べる」（*Briefe*, S. 133）のであった。手紙を書くことは、彼女の生活の一部となり、そこには、パリの社会、友達や彼女の周りで起こる毎日の出来事や新しい情報について書かれていた。彼女は同時代の男性とは違って書くことを職業的な義務であると感じず、また各地にいる文通相手のことを負担だと思わなかった。大人になって結婚した娘に宛てて、1675年に次のような手紙を書いてはいるが。

私は書き物と運命を共にすることはありません。私は読書をし、刺繍をし、散歩に行き、何もしない（…）一つ確かなことは、私が書くということに陶酔しないことです。私は喜んであなたに手紙を書き、あなたと話し、私はおしゃべりをします。それをあきらめることは不可能だけれど、私はこの趣味を広げるつもりはありません。他の人たちと話すときは、やらないといけないからやっているのです（*Briefe*, S. 139）。

娘宛ての手紙や、彼女をとりまく世界についてあれこれと書くことは、17世紀のフランス貴族の他の女性たちと同じように、年老いたセヴィニエ夫人の生活の一部になった。彼女の人生は手紙と小説のなかの文章へと編纂され、それを通して表現された。

17世紀及び18世紀の貴族階級の女性たちは、家の跡継ぎを産み、政治活動に奉仕し、そして（特に国を治めている家族であったならば）一家の代表という役割を果たさねばならなかった。彼女たちの場合よりも、裕福で貴族の生活様式を真似していた市民階級の女性たちの場合は、さらに私的な生活が手紙の内容になった。そして彼女たちの私的な生活の中心は夫であり、人生は夫を中心に回っていた。例えば、ルイーゼ・アーデルクンデは、ライプツィヒの教授ゴットシェートに対して、出会いから10年も経ち、結婚して

から2年を経た1737年にも、次のような手紙を書いていた。

鐘が5時ちょうどに鳴って、あなたからの手紙への欲求がもう私を早く眠りから起こす。(…)私にとってのこの眠れない時間は、唯一価値のあるもので、そして世界中で唯一愛する人と会話をするに使うのが一番良いのです (*Frauen der Goethezeit*, S. 54)。

ルイーゼの手紙は、その場にはいない夫との対話や会話に役に立つのであった。次の手紙では、彼女は不安そうに尋ねている。

この旅で出くわしたものは何ですか？天気はどうですか？旅路はどうですか？(…)あなた、最愛の人と喋るとすぐに、私の全くの心情が明るくなります。そして、ペンを置くとすぐに、以前のような悲しみの中に沈んでしまいます。(…)私の魂が持つあなたに対する全ての感情やその他のことを書きます。書くということは、あなたがいないという事実をほんの少し耐えることができる、たった一つの手段なのです (ebd.)。

いくらフォーマルで丁寧であっても、(夫婦は18世紀の終わりまでお互いを「Sie」で呼び合っていた——クリスティアーネ・ヴルピウスもまだゲーテをそのように呼んでいたが、彼は一般人の少女をもちろん「du」で呼びかけていた) その手紙の文中には夫の存在を、手紙を書くことで補おうとする思い、また自分自身を夫に思い出してほしいという思いが響き渡っていた。そこには、「私がいなくても、あなたに対して思いやりがあって誠実で従順なルイーゼのことも思い出して」という結びの言葉があった。個人的な関係性というものは、家を空けている家族、男友達もしくは女友達と語り合い、情報を提供し合い、お互いの関係を確認するような女性の手紙がきっかけとなるのであった。

ゴットシェート夫人が、もっと後になって友人であるヘンリッテ・フォン・リュンケルに宛てて書いた手紙は、夫が抱いている規範に従った手紙よりもはるかに注目すべきである。ここには、彼女の内面、感情や失望が表現されていた。話題の中心にあるのは、ほとんど（常に要求の高い）夫や教養のある世界ではなく、ゴットシェート夫人というこの模範的な女性が抱く孤独や懐疑であった。1758年の7年戦争のとき、彼女は友達に宛ててこのように書いている。

でも未来の予感が、ひょっとするともうすぐ、想像し危惧していたことが現実になるかもしれないという恐ろしい予感が、私を酷く苦しめます。そして、積み重なった仕事や家庭の不安や体調の問題をやり過ぎたあとの、わずか一瞬の休息を奪ったのです。

ああ、戦争によってもたらされる種々の苦しみ、長く続いて、それが時には何百年も残る不幸の根源となる苦しみを、この世の偉大な人たちは考えてくれたらいいのに。愛する友人たちよ、死ぬべき運命にある数人の功名心が招いた世の中の不幸を私と共に嘆き悲しみましょうか（*Briefe*, 3. Teil, S. 121）。

1776年になって初めて、ゴットシェート夫人の手紙は女友達によって編纂された。彼女は書簡のもつ100年の歴史のなかで卓越した手紙の書き手としてみなされているにもかかわらず、その書簡集はそれ以来再び出版されることはなかった。一方で、古典主義とロマン主義の有名な作家たちの交友関係には、女性たちの手紙が存在感を示していた。女性たちの手紙が出版されたのは、これら古典主義やロマン主義の男性たちについての情報を我々に伝えるためであった。最も有名な手紙を挙げるならば、ラット夫人、シュタイン夫人、リリー・シェーネマン、マリアンネ・フォン・ヴィレマー、シャルロッテ・フォン・シラー、カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲン、カロ

リーネ・フォン・フンボルト、スゼッテ・ゴントルト、ゾフィー・メロー、カロリーネ・ベーマー＝シュレーゲル＝シェリング、そしてベッティーナ・フォン・アルニムの手紙である。手紙の中で書き表されているような彼女たちの人生は、偉大な（またはそんなに偉大ではない）作家の生活空間や世界を明らかにし、補い、そして美化するものとして注目された。

ラーエル・ファルンハーゲンに関してだけで言えば、思いやりのある夫が最初に手紙を選りすぐり、『ラーエル／友人に対する思考の本』（1834年）を彼のアイデアに基づいて軽い修正を施した。夫のカール・アウグスト・ファルンハーゲンは自身の記念としてこの本を位置づけ、そこには自身のことと、どん底にあった時代、すなわち解放戦争とロマン主義の風潮があった自由なベルリン社会についても書いた。ゲーテとシラーの往復書簡や、『ゲーテとある子供との往復書簡』（1835年）にはじまるベッティーナの書簡本が出版された1830年代というものは、偉大な文学的書簡の時代であった。手紙が文学化されたことは、往復書簡と共に一つの独自のジャンルを生み出したかのように思われた。しかし、これはたいていの場合、人物や文化史への関心にとどまるだけであった。

文学化された手紙に表れていたのは、市民階級出身の女性が有している言葉の表現力の進歩だった。このように言語を段々と器用に使うようになり、かつ知的に活動するようになったことが、18世紀のドイツ人女性（フリードリヒⅡ世の妹、ヴィルヘルミーネ・フォン・プロイセンのような貴族階級の女性はフランス語で手紙を書いているが）の手紙に見受けられる。たしかに、アウグスト・ボーゼやベンヤミン・ノイキルヒのような17世紀における恋愛作家たちは「女の手紙」を書こうと努め、文通相手への返事には可愛らしく振る舞い、かつ利口な印象を与えるような「若い」女を演じようとしていた。しかし、男性が抱く美しい性というイメージがもたらす中身のないお遊びは別として、18世紀初頭では、ほとんどの女性が永遠と喋り続ける鳥のようにプントやコンマを書かなかった。（教養のあるゴットシェート

夫人はもちろん例外であるが。)たとえば、ハンブルクのアナクレオン派である寓話作家の母アンナ・マリア・フォン・ハーゲドルンは1731年にこのように書いている。

6通あるあなたの手紙は確かに受け取りました。そして書かれたものはもう出発したシュミット氏を除いて全員に送られます（…）大学生活の始めはできる限り一人で行動するように心がけましょう（…）付き合いが増えると心の気が分散されて喜ばしい出来事を台無しにするので時間をかけて学ぶくらいじっくりと考えなさい（Reinhard Nikisch: *Die Frau als Briefschreiberin im Zeitalter der deutschen Aufklärung*, S. 32）

心配した母はよそ（イエーナ）で勉強中の息子にこのような助言を与えている。その内容は、母から息子へ、何度も繰り返されたことであった。アンナ・マリアはそれほど教養がなかったために、話すことが困難で、かつ書くことも難しく下手な文字しか書けず、分かりづらい内容と外来語をドイツ語に散りばめた。そこには、彼女の内心の不安が覆い隠され、自分のことを伝える余地はなかった。

18世紀においてもまだ、多くの女性たちは限られた視野しか持ち合わせておらず、表現力も不十分であった。この事実が、啓蒙主義下における最も高名なドイツの文筆家レッシングの母親と姉であるドロテーアとサロメの（最低でも受け取られた）手紙の中で明確に見受けられる。レッシング家の手紙を編集していた人が、レッシング宛てに届いた手紙もすべて含めて収録していたおかげで、これらの手紙は印刷されて残ることになった。文法が不正確で、かつ「間違い」により崩壊している手紙には、（生活のあてがなく結婚していない）レッシングの姉が、寡婦となった母親と自分のために、有名な啓蒙主義者レッシングにお金をせがんだものがある。

私があなたに手紙を書こうとすると涙が止まりません 私が手紙を出さずにあなたにお願いをするということが十分失礼であることはわかっているのです (Gotthold Ephraim Lessing: *Sämtliche Schriften*, Bd. 17, S. 142)。

レッシングの母親と姉に言語的、また文学的素質がなかったことは確かである。しかし、レッシングの父親が4人の息子全員に大学教育——こうして市民階級の職に就けるのだが——を受けさせるために借金を作り、そのためにレッシング家は生活を切り詰めていたということを考えると、言葉で表現することがこの2人の女性にとって困難であったということは甚だ明白であった。父親は未婚の姉と神父の寡婦を扶養すること（最低限の年金が1770年代の急速な物価高によって大幅に目減りしていた）を考えなかったし、また息子たちも実際に資金のない女性を扶養する責任があると思っていなかった。18世紀のドイツで花開いた文学の著者は、ほとんどがレッシング一家のように、福音派牧師館の生まれであった。しかし、この家族の女性たちは知的な生活と教養から広範囲にわたって閉め出されていたのだ。そのことを我々は女性たちの手紙で、さらにゾフィー・フォン・ラロッシュの書簡形式でも読み取ることができる。

『シュテルンハイム嬢』を書いた有名な作家は、多くの私的な手紙を時にはフランス語で、時にはドイツ語で話したり書いたりするように素早く、簡潔に書いた。そして彼女は（ラテン語の影響を受けた）ドイツ語の文法や文構造という狭い枠組みの中で考えず、同じように自身が話すシュヴァーベン地方の方言を全く否定せず、排除するようなことはしなかった。ラーエル・ファルンハーゲンも学校教育の不足と体系的な教育について訴えた。彼女が打ち出したのは、多々あるアフォリズム的形態、思考を連想し飛躍させること、テーマを多様化し、一つの事柄を深掘りすることであった。それらはたしかに、彼女が男性の教養システムから排除されたことに由来するかも

しれない。しかし、女性たちが知的な生活と男性たちの教養システムから閉め出されたという事実は、本当に悪いことだけだったのだろうか？システムから排除され、慣習を持ち合わせていないからこそ、書き物をする女性たちは新しい可能性と文章形式を見出したのではないか？

ゲラートは、個性的な会話表現を使ってその人らしさを表している書簡体を紹介した模範本『手紙、あるいは手紙における良い趣味による実践論』（1751）のなかで、女性について指摘している。その中で彼は、女性は男性よりも自然な手紙を書くということに注目している。シェーンフェルト嬢と、ゲラートによって有名になったルイーゼ令嬢——彼女のはちに成功した戯曲も書いたのだが、文学史では無視されてしまった——との往復書簡は、ゲラートの持つ意見の正確さを裏付けている。この女性たちは手軽に、かつ自然で簡潔に書き、気取った形式や不自然な文は書かなかった。それはまるで彼女たちが相手とおしゃべりをし、そのうえ会話をし、彼女たち自身の感情や考え、経験を伝えているようであった。それは1750年あたりの——既にゴットシェート夫人が20年も早くに手紙を書いているのだが——ドイツの書簡における新しい文体であった。そして、この新しい文体はフランスやイギリスによる影響もあった。当時、多くの小説や素晴らしい文学、書簡集がこれらの言語からドイツ語に翻訳され始めていた。

城、サロン、そして市民の家：著名な女性の手紙と回想

手紙文化というものは、最初は貴族に始まって、それから幅広い階級の市民女性も、私的な内容の手紙を書くようになった。このような過程で、我々が注目すべき手紙の作者は17世紀、特に18世紀には有名になり、そして彼女たちの作品が——しばしば回り道をへて——出版された。例えば、セヴィニエ夫人の手紙は既に存命中に広まっていたが、初めて発行されたのは彼女が亡くなってからだった。最初の全集は1754年のはじめに出版され、そのあとすぐにドイツにも出版された。ドイツにおいて彼女の全集は、形式や文

体面での模範として純粋な文化史的関心の対象であったと同時に自然で作為のない模範的な手紙ともみなされ、著者の鋭い観察力が称賛された。ただし、自分の手紙が出版されうる、もしくはされるべきという考えが彼女に全くなかったのかどうかは不明である。彼女の手紙は朗読や回し読みに使われていた。克蘭ジュにいるいとこのビュッシー・ラブタンとフィリップに宛てた手紙は、綿密に書かれており、小さな芸術作品のようだった。娘に宛てた手紙は自然な表現がなされ、伝えたい内容が十分に含まれていた。(もしくは、前者は教養のある男性の期待に応え、後者は娘に寄り添いたかっただけと言えるだろうか?)

こうしたフランス人女性が書いた手紙は、良いとされた文体規範だけではなく、手紙から得られる貴族や上流社会の生活についての豊富な情報を広め、歴史的ないしは文化的な価値をも有していた。特に貴族階級の人々は、17、18世紀のフランスのサロン社会の女性たちと同じく、高尚な、もしくは日常では想像できないような人物だと思われていた。そうした女性たちの手紙と回想録が——全く権威を与えられないことも多々あるが——最初は抜粋されたものが広まり、それからのちに個々の作品集のなかに組み込まれた。特に、歴史的及び文化史的な関心が高められた19世紀においては、女性たちの手紙と回想録に尽きることのないテーマが見出され、新しい世界が発見された。この発見と女性たちの書き物に関していえば、興味を持たれたのは書き物をする女性たちの手紙そのものではなく、赤裸々に語られた女性たちをとりまく世界や、いかがわしい恋物語についてであった。スキュデリ夫人からスタール夫人まで、彼女たちの手紙や回想録は、思うままに愛することを喜ぶ世界の魅力を表す原点として未だに読まれている。そして彼女たちは封建制のフランス社会で堂々と思いのまま生きる女性としても、とりわけ注目されている。

デファン夫人は1753年に聖ヨセフ修道院(未婚の貴族女性にふさわしいこの場所に、死ぬまで27年暮らした)にあったひとつづきの部屋に有名な

サロンを設立し、ヴォルテールやホレス・ウォルポールその他の人々と文通をしていた。これら著名な男性たちとの関わりから、彼女の手紙は回想録文学という位置づけがなされた。それは活気にあふれ、多くの同時代人の噂話を含んでいた。その一方で、次の文章は、老いを迎え諦念した女性の卓越した映しともなっている。「私の周りには単なる愚か者とペテン師しか見当たらない。しかし、私は彼らと生きることを以外、他のことは何もできない」（*Letters of Horace Walpole*, Bd. 7, S. 207）と。さらに、まだ発見されるべき素晴らしい女性の手紙書きがいる。それは彼女の姪、ジュリーである。

ジュリー・ド・レスピナスは17歳のとき、叔母の付き添い役としてサロンへと連れてこられていた。そこで、彼女は教養や精神、文学的な知識を身につけることができた。10年後に2人は和解のしようもない絶交をし、その後ジュリーは自分のサロンを始めた。そのサロンには叔母にとって最も有名な客たち、例えばそれまで叔母の親友だったダランベール（ジャン・ル・ロン・ダランベール）も移ってきた。批判的でからかいがちで、かつきわめて知的な叔母と違って、ジュリーは活気に満ちた男性にとって、大人しく、控えめで、思いやりがある（そしてより若い）聞き手となった。その反面、彼女は常に愛想の良いサロン夫人という仮面の下に、個人的な苦しみを隠した。スペイン人モラ侯爵、次いで若い文学者のギベール伯爵との関係がうまくいかず、その一方で、彼女が父親のように慕っていたダランベールから燃え立つほどの思いを寄せられていたのである。そして結核のためゆっくりと死が近づいていた。ギルベールが1775年（ジュリーが44歳で結核のために亡くなる前の年）に結婚したとき、彼女は苦しみながら、そして絶望しながら、失望した手紙を彼に宛てて書いた。「私は過度に、気が狂ったように、夢中になって、そして自暴自棄になってあなたを愛しました。（…）あなたは私に信頼、不安、苦痛そして喜びを教えたために、私はあなたをひどく嫌っています。こんな感情はいらなかったのに、どうしてあなたは私を放おって置いてくれなかったの？」（*Correspondance entre Mademoiselle de*

Lespinasse et le Comte de Guibert, Bd. 2, S. 57) この苦しみの手紙はもちろん世間に向けたものではなく、愛する人に宛てた詩的な書簡である。それは、ジュリーの感情や苦しみのすべてを表すものであった。アンシャン・レジームが幕を下ろしてしばらく経ったあと初めて、手紙は出版された。

1749年から亡くなるまで、パリで有力な文学サロンを運営し、作家としても有名であったエピネ夫人についても、同じような経緯があった。彼女はすでに長いことメルヒオール・グリムの文芸通信（これはライプツィヒからパリへ移り住んだグリムが2週間ごとにヨーロッパの権威のある宮廷に送った私的で個人的な手紙を集めた文芸誌である）を彼の同僚として手伝っており、そこで素材の選別と編集をしていた。彼女が息子に宛てた手紙は、『息子への手紙』に編纂されて教育書『エミリーの会話』（1775）と共に発表された。この書は母親が娘に人間的そして実践的な助言を与えつつ、貴族的な教育を非難するという内容であった。（この書については、フランスのアカデミーから——有益なものに対する——初めての賞をもらってさえいる。）1818年になってはじめて『エピネ夫人の回想』が出版された。これは彼女の40年の人生を記録したもので、革命前夜のフランス社会をほとんど覆い隠さず批判的に描写したものであった。

ジェンリス夫人も、19世紀の女性たちに最初の職業的な活動（もちろん女性たちは常々手作業や清掃員、召使という仕事をこなしていたが）を可能にしたもの、すなわち教育という領域で「有益であること」をした。彼女はシャトレ公爵夫人の女官から、のちにブルボン王子となるルイーゼ・フィリップの子供の教育者へと成り上がり、オリジナルの教育手法を展開した。それについては彼女の多くの著書に記録されている。革命以来、彼女は亡命先で生活をし、西ヨーロッパじゅうで文通を広げ、（ナポレオンは1802年に彼女を呼び戻し、年金を与え、学校の監督局長にさせた）そして多数の小説と歴史作品を書くことに専念した。8巻からなる彼女の『回想』（1825）は、生き生きとし、わかりやすく博学な18世紀後半の時代小説である。こに

は（貴族の）女性の視点が表現されており、家族的で女性らしい（しかしフェミニスト的ではない）考え方で世間（既存の支配構造と政治）をくまなくみていた。ジェンリス夫人の作品と人柄はまだ発見される価値がある。

フランスのサロン社会に最も独創的な18世紀の女性作家が現れた。スタール夫人である。ジェルメールヌ・ド・スタールは、子供のときから既に母親のサロンでの会話に参加し、そこでのにぎやかな雰囲気に加わっていた。そこで、この才能のある早熟な少女は有名なフランスの知識人や文学者と語り合っていた。ジュネーヴから移住した裕福なフランス人であった彼女の父親は、自分を熱烈に慕っていた娘たちを甘やかして、政略結婚を取り決めた。その結婚でジェルメールヌは、自分の情愛、色事、文学や政治的な野心を追求するという自由を得たのだった。（1799年の初め、彼女は、大したことのなく、どうしようもないくらいに借金を背負ったスタール・ホルシュタインと最終的に別れた。）シラーは、1803年のワイマール訪問のあと、スタール夫人という人についていくためには自分自身を完全に聴覚器官に変える必要があると考えたという。（彼が修道会の正装で聴衆の前にやってきたので、彼女は、初めはシラーを修道会の総長だと思っていた。）彼女の会話は、手紙の中と同じくらい熟練したもので、創造力が豊かで飽きることなく、独特なものであった。しかし、多くの手紙（及び彼女の父親、バンジャマン・コンスタン、彼女の友人であるレカミエ夫人、ウェリントン、大公妃ルイーゼ・フォン・ワイマール、A・W及びフリードリヒ・シュレーゲルに宛てたその他の手紙）は彼女が活着している間に公開されることはなかった。それらは、家族資料によって20世紀の初めに徐々に明らかにされた。彼女の2つの大作、すなわち自叙伝的な小説が出版される前に、彼女は（ルソーについて、抑えがたい激情、社会的な慣習と比べた文学について、また平和についての）政治や文学的な書物を書いたが故に（また、ナポレオンが彼女を1803年にパリから追放したので）名高くなり、恐れられていた。

書簡小説『デルフィーヌ』(1802)と『コリンヌあるいはイタリア』(1807)

の女主人公——フランス語版での出版と同じ頃にドロテア・シュレーゲルによってドイツ語に翻訳された——は、スタール夫人が人生のうちで経験した重要な観点を具現化していた。というのは、2人の女主人公は、強い芸術家的な素質と才能を見せ、窮屈な社会にある女性への規範を無視し、理想的な愛に対して尽くし、豊かで哲学的で、かつ多様な感情の世界を示した。特に書き物をする女性にとって、コリンヌという人物像はなんともいえない魅力を兼ね備えていた。コリンヌはスタール夫人のように、卓越した社会的立場、才能、父親から受けた教養そして教育のおかげで文学的で感情的な人生を送っており、それはスタール夫人が生きた時代の多くの市民女性たちが、夢を見ることすらできなかった人生である。彼女は追放されて実質的に政治から閉め出されたあとで、ロマン派的な、文学と芸術のミューズとして生きることになった。スタール夫人の人生と小説には、非凡な能力を持つ女性が文学や芸術の領域に持ち得た可能性を見て取ることができる。彼女たちはこの可能性を具現し、同時に規定されてもいたのである。

イギリスにおいても、女性の文学への参入は手紙や自叙伝的なテキストを通してなされた。それは、彼女たちの道徳的評判を損なうものではなかったが、筆でお金を稼ぎ、男性と競争をする女性たちは誠実な社会に見下されていた。だが、既にアフラ・ベーンとスザンナ・セントリヴァーは大成功した戯曲で（ささやかな）暮らしを手に入れることはできたし、デラリバー・マンリーとエリザ・ヘイウッドもまた、物議を醸すような小説で稼いでいた。そのうえ、1711年にジョナサン・スウィフトが、マンリーをトーリー党の雑誌「The Examiner」の編集者として跡を継がせた。（マンリーは自身の小説でホイック党の党員を激しく非難し、そのスキャンダルを暴露した。）しかし、同時代の人々は、ありのままに書かれた小説と女流作家としての品行を不快に思った。また、エリザ・ヘイウッドはアレクサンダー・ポープの『ダンシアド』（1728）でかなり非難された。そのため、彼女の作品は20年経ってからようやく再版された。（そして大部分は匿名であった。）のちの小

説と道徳週刊誌『女性の観点』（1744-46）はヘイウッドの最高傑作の一つである。これらの女流作家たちは他の人たちと比べて伝統にとらわれない人生——例えば、マンリーが夫との二重結婚を知り婚姻上の関係を無効にされ、そのあと彼女が他の男性と一緒に暮らしていたように——を送っていたのだが、それはまるで売春することで生活していたかのように思われ、とても非難されていた。

上流社会の出身で、良い名声を重視していた女性たちは、言い訳をして書くことを隠さなければならなかった。だから、メアリー・ウォートリー・モンタギューは自身が書いたエッセイと詩を手書きという形でのみで広めるか、匿名で出版するしかなかった。彼女は、『トルコ書簡集』の原稿を人に託し、その原稿が、自分が死んだあとに刊行されることを期待したのだった。ついにそれは1763年に実現した。彼女の私的な手紙（およそ900の手紙が現代版に含まれている）は、最初は短い構成だったのだが、10年経ってやっと出版されたのだ。

モンタギューの『トルコ書簡集』は、彼女がコンスタンティノーブルにある公使館まで、夫に同行したときのものが元になっている。物事を鋭く見て取り、輝かしい言葉で表現されたその手紙には、彼女が経験したことと、それによって感じられたことが書き下されていた。彼女は自身でその手紙を製本し、さらに（他の版には含まれていない）日記と当時のオリジナルの手紙を組み込んだ。個人に向けた手紙は文章のスタイルを相手に合わせる（彼女がポーブに宛てて送ったのは、例えばトルコ人の詩人についての知的な議論、コンティ修道院長に宛てたのはイスラムの宗派についての手紙、彼女の若い頃の友だちに宛てて送ったのは、ノッティンガムに似ていたオランダの街についてであった）一方、『トルコ書簡集』は目の前に情景がうかぶようなニュアンスで表現された旅と文化体験を示していた。

彼女の私的な文通に関していえば、娘との文通は特に有意義なものであった。モンタギューはそのとき既に、夫と離れて北イタリアで暮らしていた。

セヴィニエ夫人と同じように、娘は親しい人に送る手紙の受取人としてふさわしい人、すなわち年老いた女性にとっての話し相手となった。モンタギューは、個人的なことや文化的な事柄について、あらゆる文体で手紙を書き、そして彼女の経験を文章にした。そこには同時に母親と娘の近い結びつき（まれではあるのだが、父親という存在が絶対的な権力を持っていた時代でも不可能ではなかった）がしまい込まれた。

モンタギュー夫人が貴族という身分と、思い通りに使える財源のおかげで生活ができたために書く機会が与えられていたのに対して、(教養のある)中産階級の女性たちは、社会における女性らしさのイメージや、全てを支配し、大いに尊敬される父親像にもっとしばられていた。彼女たちは、男性作家には想像できなかったであろう状況下で執筆していた。フランシス・バーニーは『エヴェリーナ』(1778)を夜の時間に書いていた。なぜなら、彼女(とその妹たち)は、昼間はずっと、今ではもう完全に忘れ去られてしまった父親の『音楽概史』の原稿を幾度も書き写さねばならなかったからだ。父親が細かい修正を何度かしたためである。彼女は自分の小説を偽装した筆跡で書いた。それは、印刷業者がその小説をバーニー家のものと結び付けないように、そして父親の名声を損なわないためであった。

フランシス・バーニーは自身の書き物を膨大なオリジナルの手紙日記(ジャーナル)で修練した。彼女は最初に、小さな少女として日記形式の手紙を「誰でもない人」に宛てて書いた。つまりそれは名前のない相手もしくは自分に宛てて書き、もちろんこれらは「男性名」(Mr.)で書かれている。宮廷で仕事をする一方、(彼女は1786から1791までシャルロッテ王妃のためのクローク整備を任されていた)彼女の妹で親密な年下の友人スザンナ・エリザベスは彼女の文通相手となった。毎月、バーニーは文通相手の妹に、手紙形式の報告と一緒に小包を送っていた。その報告は、彼女が最初に書いたメモを元にして、日記文章へと形式を変えたものであった。(1800年の1月に最愛の妹が突然死んでしまったから、バーニーは親密な手紙形式の日記

をほとんど書かなくなった。)のちの「ジャーナル・レターズ」で文学的な文書により半分が公開された。それは彼女が書いた手紙やメモ書き、思い出を編纂し、再構成したもので、ユーモアを伴った生活がしばしば垣間見えていた。(そこには礼儀を欠かさなかった。)

2つの大成功した小説『エヴェリーナ』と『セシリア』(1782)はバーニーを有名にした。(しかしながら財政上の自立はもたらさなかった。)彼女は、のちの小説『カミラ』(1796)と『さまよう人』(1814)(この小説とのちの「ジャーナル」の収益は息子のケンブリッジ大学の学費にあてられた)もそうだったように、自身の人生経験を(スタール夫人のような)芸術を愛する情熱的な女性が持つ大きな構想のなかではなく、貴族社会に受け入れられるような、ことさら女性らしい小説形態の中に落とし込んだ。小説にある架空の世界には小さな経験や人間関係、心理的な共感に満ちた場所であった。そこでの女主人公は——例えばエヴェリーナのように——上品であって、貴族家系の出であることが示されている。彼女の物語は、理想的な結婚で幕を下ろす。女性が気に入られ、適応しようと努力するのは、男性に支配され、男性の価値基準に合わせられた社会の中で、女性として生きることの深刻な不安と心配に由来している。バーニーはこの社会、すなわち女性は美德そのものを表すことでしか自らの状況を自発的に変えられないという社会における、女性という傷つきやすい立場を恐れていた。そのことによって彼女は、家父長制が定めた枠組みに囚われてしまった。この枠は、まさにそうした理由から彼女の小説を二流でつまらないものとし、文学の主流から外れたもの——女性の小説——に押し込んだ。ジェーン・オースティンの場合は——彼女の長編小説は1811年に初めて出版された——同じような仕方で彼女の小説が二流のものとして扱われることはほとんどなかった。その理由は、一つは彼女の父親と家族が彼女の執筆活動を支援し、もう一つは匿名で公開(彼女は家族以外に自分が女流作家として知られることを拒絶した)したことが、女性としての自分を守った。そのお陰で、彼女は自由に空想できたの

だ。ジェーン・オースティンを皮切りに、書き物をする女性の偉大なる時代は英文学の中において始まったのであった。

(続く)

(Barbara Becker-Cantarino¹⁾: “Leben als Text. Briefe als Ausdrucks- und Verständigungsmittel in der Briefkultur und Literatur des 18. Jahrhunderts”. In: Hiltrud Gnüg / Renate Möhrmann (Hrsg.): *Frauen Literatur Geschichte. Schreibende Frauen vom Mittelalter bis zur Gegenwart*. Stuttgart: J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1985, S. 83-91.)

注

- 1) バーバラ・ベッカー＝カンタリノ：18世紀から19世紀文学を専門とするドイツ文学者で、ロマン主義時代における女性作家研究の第一人者である。現在、オハイオ州大学名誉教授。主な著作に次のものがある。*Bettina von Arnim Handbuch*. Berlin: De Gruyter, 2020; *Meine Liebe zu Büchern. Sophie von La Rosche als professionelle Schriftstellerin*. Heidelberg: Winter, 2008; *Genderforschung und Germanistik. Perspektiven von der Frühen Neuzeit zur Moderne*. Berlin: Weidler, 2010.